〈連載〉4

「信仰宣言（クレド）」のカテケーシス

(Ⅳ)「聖霊を信じる」

竹山昭

わたしたちは、父なる神に自分自身をうちまかせ、子である主イエズス・キリストに自らを託したように、「信仰宣言」の第三項で聖霊に自分自身をうちまかせる。すでに最初の回にふれたとおりである。

しかし、第三項で「聖霊を信じます」と信仰告白しながらすぐに気づくことがある。それは何かと言えば、父なる神やひとり子主イエズス・キリストの場合には、長短の違いこそあれいずれにも説明の句が付けられているのに、ここでは聖霊に何らの説明も付けられていないことである。

むろん、ほどなく次々にできていく、この洗礼の信条より長い形の諸信仰宣言では、聖霊が神であること、父と子よりのものであること、などなどが加えられている。しかしそれは、聖霊が被造物であるとの異端が出てきたり、東方教会（ギリシャ語圏内の教会で独自の典礼を持つ）と西方教会の間の神学上の論争が生じたことへの対処のためであった。すでに父なる神やひとり子主イエズス・キリストの項が説明句を伴っていた二、三世紀には、聖霊には何らの説明も付けられていないのがふつうである。この事実に聖霊の特徴が示されているとは言えないだろうか。

一、固有の「顔」と名を持たない神・聖霊

《わかりにくい神・聖霊》

「イエズスさまのことは福音書がたくさん語ってくれますし、イエズスさまほどではないとしても、おん父のことはイエズスさまのお話によく出てきますので身近に思われます。でも、聖霊のこととなると、いつもあいまいで、考えようとしてもいまひとつつかみどころがないという感じです。聖霊のことを説明してくださいませんか」。婦人がたを対象にした聖書クラスで、ある日、質問の時間に、一人のご婦人からこう言われた。どこを読んでいたかは覚えていないが、きっと聖霊のことが述べられている箇所を読んでいたのだろう。

これはもはや単なる一人の婦人の疑問というよりも、多かれ少なかれほとんどのキリスト者が抱いているに相違ない、聖霊に関するある種の困惑を表していると言えよう。

あまり時間もなかったこともあって、その時には簡単に二つの点だけを話した。一つは、そのご婦人の当惑はある意味で当然のものであり、根拠あるものだから心配する必要がないということである。もう一つの点は、聖霊は、いつもわたしたちの、いわば最も内奥にあってわたしたちを照らし、促し、押してくださるので、聖霊をわたしたちの〝前に〟おいて考察の対象にすることができない。そうしようとすると、またわたしたちの、いわば〝背後に〟まわって姿をかくしてしまう。聖霊の目指すところはイエズス・キリストにわたしたちを向かわせることであって、自分に引きつけることではないからだ。およそこんな意味のことであった。

そのご婦人がそれで得心したのかどうかは定かではなかったが、安堵の様子はうかがえた。聖霊をめぐる教会の教えも神学の考察も、神やキリストについての場合と比べれば、実にゆっくりとしか進展しなかったし、今もって詳しい展開がなされているとは言い難いと言われている。そして、〝わかりにくさ〟同様、これも聖霊の特徴に根ざしていることだと言わざるをえない。

《固有の名と顔を持たない聖霊》

新約聖書が「聖霊」と言う表現を用いるのに相応する旧約聖書での表現は「神の霊」、つまり「ヤーウェの霊」である。しかし、意味内容は同じである。専門家たちの意見では、ユダヤ教内で次第に神の名を口にすることを避けるようになったことから、神の名の代わりに神の属性である「聖なる」を用いるようになったと考えられている。神の霊はこの世の霊とは異なっており、まさしく「聖なる霊」であって、この場合の「聖なる」は「神の」と同じ意味である。

「神の霊」は、旧約聖書では、世界の中に働く神の力、もっと正確に言えば、人間や宇宙、歴史や自然界に働く神ご自身を意味している。

新約聖書でも、同じ意味で用いられる例も少なくない（ルカ1・15、35ほか）。

「霊」は旧約聖書でも新約聖書でも、元来「風」や「息吹」を意味する「ルアー」（旧約）や「プネウマ」（新約）の訳である。風はさまざまに変化しながら、どこから吹いてくるのかわからないし、人の手でとらえることも目で見ることもできない。ひとたび風が吹きわたると、抗することもできない。息吹は、人間の生命のしるしでありながら、これもまた目で見ることはできない。人の生命のリズムはその息吹にあらわれ、息吹が止まれば、人は死ぬ。

新約聖書は、聖霊をさすのに、まさにこうした「聖なる（つまり神の）プネウマ」を用いるのである。それでも人は、「でも、ともかく〝聖霊〟という名がつけられているではないか」と言うかもしれない。しかし、すでに述べたように、聖書においては「聖」とは神の属性、神の特徴を表すのであって、「神の」という意味である。

「聖書には父と子と区別され、しかも神である聖霊の存在が啓示されている。しかし、この聖霊は固有の『顔』を持たず、また固有の名さえも持ってはいない。事実、父なる神もキリストも霊と呼ばれ（ヨハネ4・24。Ⅱコリント3・17）、『聖』と呼ばれている（イザヤ12・6。ルカ1・35）」（P・ネメシェギ「父と子と聖霊」）。

聖霊はまことに、〝顔のない〟神、〝固有の名を持たない〟神である。したがって新約聖書は、わたしたちが告白する意味での聖霊を明確に指す場合には、父なる神や子に定冠詞をつけるように、聖霊にも定冠詞をつけて用いたり本来は中性形のプネウマを男性形として扱ったりすることで、〝あの特別な意味での神の霊〟、つまり聖霊のことだと伝えている。その他の場合には前後関係やそこでの主題などから判断するしかない。

これほどまでに徹頭徹尾自らの「顔」と「名」を主張しないということは、むしろそこに聖霊の聖霊たる特徴を示していると考えられよう。実際、新約聖書は（そして教会の信仰も）聖霊を「主キリストが遣わす霊」、「子の霊」として、また「父が遣わす霊」、「父の霊」として示すことによって同じことを教えてくれている。聖霊はまずもって「子である主キリストの霊」、「父なる神の霊」なのである。

二、父と子の霊である聖霊

新約聖書の諸文書中で聖霊に関して多くを語ってくれて

いるのはパウロの手になるものである。そしてヨハネもまた聖霊についてもっとも深い証言を伝えている。共観福音書はわずかの箇所を別にすれば多くを語らない。

特にヨハネとパウロは、聖霊を父と子の霊として伝えてくれている。

《子である主キリストの霊》

最後の晩さんでの長い話の中で、ヨハネは弟子たちに聖霊を送ることを約束するイエズスの話を伝えているが(14～16章)、そこで聖霊は「真理の霊」とも、もうひとりの「助け主(弁護者)」とも呼ばれている。聖霊はイエズスについて証しイエズスが語ったことをことごとく思い出させてくれる。弟子たちとともに、弟子たちのうちにとどまる聖霊は、自分のことばではなく、イエズスから受けたものを弟子たちに告げ、こうしてイエズスを弟子たちに明らかにする。

したがって、聖霊は弟子たちにイエズス・キリストを認めさせることによって、反キリストの霊と自らを区別する「人となって来られたイエズス・キリストを認める霊」(Ⅰヨハネ4・2－3)と言われているとおりである。

イエズスは、父のもとに行ったらこの霊を弟子たちに遣わすと約束し(15・26)、復活したキリストは弟子たちに聖霊を注ぐのである(20・19－23)。

パウロは父と子と聖霊の区別や関係よりも、むしろ父がキリストをとおして聖霊において実現する救いの働きにおけるダイナミックな一致に注目している(P・ネメシェギ、前掲書)。そのパウロでも、聖霊が主キリストを告白させる霊であることに変わりはない。「聖霊によらなければ、だれも『イエズスは主である』と言うことはできない」(Ⅰコリント12・3)。したがって「もしキリストの霊を持たない人がいるなら、その人はキリストのものではない。……すべて神の霊によって導かれているものは、すなわち、神の子である」(ロマ8・9、14)。

多くの例をこれ以上重ねるまでもあるまい。

ヨハネやパウロが告げ、後代の教父たちに受け継がれて行くように、聖霊はわたしたちのうちにあって、自らにわたしたちを向けようとはせずに、子であり主であるイエズス・キリストへと向かわせる。主キリストはご自分の霊である聖霊をとおしてわたしたちに働き、わたしたちとともにいる。

聖霊は、わたしたちをいつも内から照らしてイエズス・キリストを証し、「主キリストへ」、「子へ」とわたしたちを押し行くかたなのである。

《父の霊》

聖霊は「子の霊」であるとともに、また「父の霊」とも言われている。

パウロは、「キリストの霊」である聖霊を「神の霊」つまり「父なる神の霊」とも表現しているが(ロマ8・14)、この聖霊によってこそ、人は神を親しみと畏敬をこめて心から〝アバ〟(父よ)と呼ぶことができるのだと言い切る。「あなたがたは……人を奴隷とする霊を受けたのではなく、神の子とする霊を受けたのです。この霊によって、わたしたちは『アバ、父よ』と叫んでいます」(ロマ8・15。ガラテヤ4・6参照)。

父なる神の愛がわたしたちに注がれていることは聖霊がわたしたちのこころに注がれているということである(ロマ5・5)。聖霊は父なる神の愛の具現だというのである。

父が子を遣わし、父が子の霊をわたしたちのうちに遣わしてくださった(ガラテヤ4・4-6)。そしてパウロと同じくヨハネにおいても、キリストが聖霊を弟子たちに遣わすのは父なる神に願ってのことであり(14・16)、父がキリストの名によって遣わすのだとも述べられている(14・26)。

こうして、聖霊は徹底して「子の霊」であり「父の霊」として姿を現す。人をキリストへと促しキリストと一致させる聖霊は、父から送られるものでもあり、子らとしてのこころをもって「アバ」と父に向かわせるかたでもある。

新約聖書ばかりではない。聖書にもとづいて、聖書が明確な表現をとらなかった、「では父と子と聖霊の相互の関係と区別をどう解したらよいのか」へと次第に関心が移るその後の思索の中でも、常に変わらず、聖霊のこの特徴は語られている。ヨハネ7・38を想起しながら、「いま、生ける水(聖霊のこと)はわたしの中で『おん父のもとへ来れ』とささやいております」と書くアンチオケのイグナチオ司教もそうであった(ローマ人へ7)。「神の霊をもつ人々はみことばへ、おん子へと導かれる。おん子は彼らをたずさえておん父にささげ、おん父は彼らに不死性を与える」と言うイレネウス司教も同じように信じた。それは今もなお教会の信仰に脈うち続けるものでもある。

＊　＊　＊

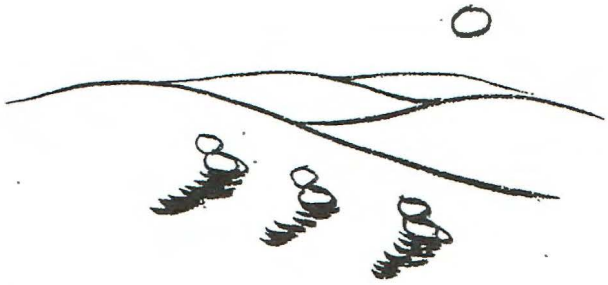
こうして、聖霊がなぜいまひとつわたしたちにわかりにくいか、どうしてわかりにくいままでよいのかの理由を尋ねて、聖霊の特徴にその根拠があることを述べてきた。

「聖霊の姿を想像したり、それに触れたりできないことに驚く理由はない。聖霊はわたしたちの前にいるのではなく、

わたしたちの中にいる。聖霊から語りかけるのではなく、わたしたちに聞いたことを思い起こさせ、わたしたちがイエズスから学んだことを語らせるのである。聖霊自身をわたしたちに知覚させることも感知させることも聖霊の役割ではなく、わたしたちの天の御父を知覚させ、御子のように、御父とそのみことばに注意深くいるようにさせるのが聖霊の役割である。……聖霊がわたしたちの中に生き、わたしたちも聖霊によって生かされているしるしは、御子自身の祈りをわたしたちの中からあふれさせ、御父に対するイエズスの感情、態度と同じものをわたしたちに与えることである」(J・ギエ、「キリストきのうきょう」)。

J・ギエが言うように、こうしたことは説明するのは困難ではあっても、素朴なキリスト者が真心から神に語りかけるなら、ただちに経験することであろう。

「幼い子に向かって呼吸の仕方を教えたり、親の家がお前の住家であると説明したりする必要はない。子どもの肺に空気があればよく、その心には家庭の雰囲気を与えればじゅうぶんである。聖霊についても同じことが言える。わたしたちが神を父と思い、イエズスを主と思うのは、わたしたちの中の聖霊のわざである。それはどんなに人間が努力しても知恵をしぼってもできないことである。信仰が、このとらえがたい聖霊を認めさせ、わたしたちの心を聖霊に向かって開かせるのである」(J・ギエ、前掲書)。

長い引用になったが、これ以上のまとめもあるまい。聖霊のもう一つの特徴、「教会の霊」を考えようとすれば、おのずと「教会を信じる」へと導かれることになろう。

(たけやま・あきら　鹿児島教区司祭)